

その他

看護学部における教員の教育能力向上を目的とした FD 活動報告

市村 路子^{※1} 鎌田 由美子^{※1} 倉島 幸子^{※1}
ICHIMURA Michiko^{※1} KAMATA Yumiko^{※1} KURASHIMA Sachiko^{※1}

キーワード

FD 研修会、教育能力向上、実習指導能力、ワークショップ

(公表 2018 年 3 月 5 日)

I. はじめに

FD とは文部省大学審議会（1998）の「21 世紀の大学像答申」の用語定義で「教員が授業内容・方法を改善し、向上させるための組織的な取り組みの総称」とされており、具体的な例としては、教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研修会や、新任教員のための研修会の開催などを挙げて説明されている。この答申は大学設置基準に FD を努力義務として明記するため、「各大学は、個々の教員の教育内容・方法の改善のため、全学的にあるいは学部・学科全体で、それぞれの大学等の理念・目標や教育内容・方法についての組織的な研究・研修（ファカルティ・ディベロップメント）の実施に努めるものとする」と提言し、平成 11 年の大学設置基準改正では第 25 条の 2 に FD 実施の努力義務が追加された。

日本の高等教育政策における FD の位置づけの変遷は、大学評価・学位授与機構における認証評価において「教育の質の向上及び改善のためのシステム」が基準 9 として設定されており、「ファカルティ・ディベロップメント」の適切な運営が大学評価基準として明記されている。平成 17 年文部科学省中央教育審議会は、「新時代の大学院教育—国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて—」と題された答申を提出し、「教員の教育・研究指導能力向上のための方策」において、大学院設置基準に「FD の義務化」を明記することが提言され、平成 19 年から大学院設置基準に FD 実施の義務化が定義された。学部教育においても FD を義務規定とするための大学設置基準の改正がされ、平成 20 年 4 月からは、「実施に努めなければならない」という努力義務が、「実施するものとする」というように実施義務に改められ第 25 条の 3 として明記された。その後、大学における FD の取り組みは、

※1 上武大学看護学部

大学の大量化の現実や大学関係者の努力、さらにそれに関連する大学設置基準の改正・施行により義務化となり評価と結んで動きが加速している。

文部科学省（2011, 2016）は「大学における教育内容等の改革状況について」取りまとめを行っており、平成 21 年度には FD を実施している大学は 746 大学（約 99%）であった一方で、教員相互による授業評価の実施は 19.7%であったことを報告している。また、平成 26 年度に国公私立 775 大学を対象とした調査によれば、教員全員が FD に参加した大学は 11%、4 分の 3 以上の教員が参加した大学は約 39%であったことを報告している。また、「教員相互の授業参観」は約 54%、「アクティブ・ラーニングを推進するためのワークショップまたは授業検討会」は約 34%の大学で実施していたにすぎない。

これらの報告より、FD はほとんどの大学で実施されているが、教員の参加率が低いことや、教育内容の改善にむけた進展が見られていないことから、FD に対して教員集団全体のコンセンサスが十分ではなく、個々の教員が主体的に取り組むまでの土壌が組織的に培われるまで成熟していないことがうかがえる。

本学においては、FD が義務化されたことを受けて平成 20 年に「看護学部 FD 委員会」が発足し、授業アンケートによる評価、教員相互の授業参観（ピアレビュー）、教員研修会などを実施し、組織的な取り組みが行われてきた。しかし片貝ら（2010）の報告では、これらの取り組みを教育方法の改善や向上のために有効活用しきれていない、取り組みが継続できていないことが課題となっていた。

そこで、平成 28 年度の FD 委員会では、これまで実施されてきた FD 活動を俯瞰し、教育方法の改善や向上を目指した FD 活動を継続するために、実習指導能力の向上を目的として、2 回の FD 研修会でワークショップを企画・実施した。ワークショップでは各領域に共通する実習指導上の問題を教員が共通認識し、日々の指導に活用できる指導方法を見出すことができた。今回の報告は FD 研修会に焦点を当て、平成 28 年度の FD 活動を評価し今後の課題を検討する。

II. FD 委員会発足から平成 27 年度までの活動

平成 20 年度から平成 25 年度までは、ピアレビュー結果の教育活動への活用、雑草祭において学生の研究をポスター発表、科研費の説明会、外部講師を招いた講演会（授業展開の仕方、研究テーマの設定・研究方法について）等を行った。

平成 26 年度は、2 回の研修会を行った。第 1 回は「臨地実習における学習支援力に関する評価・報告」を実施し、全教員を 4 グループに分け、実習上の問題、課題を討議し発表した。実習についての検討は初めてで、各領域の教員が問題を共有し検討できた。第 2 回

は、看護研究が必修科目になることに伴い、看護研究倫理審査委員の教員より、「①倫理審査申請書類の書き方 ②看護系大学学部生の研究テーマについて」の講義を行った。

平成 27 年度は、「看護研究における統計処理」についての講義、基礎学力不足の学生に対する学習支援、看護研究 Q&A、学会での研究発表と参加報告を行った。

Ⅲ. 平成 28 年度 FD 活動の実施および評価

1. 活動目標

- 1) より質の高い教育活動を推進し、教育力の向上を図る
- 2) 教員の研究活動の推進

2. 活動内容

FD 活動の実施状況を表 1 に示す。

3. 結果

1) 「看護研究」の研究指導を目的とした統計処理に関する研修会

調査研究等に必要となる統計処理について、学内教員による講義を実施した。看護研究に必要な統計処理の基礎知識（クロス集計・検定）について、学内マルチメディアセンターで各教員が PC を操作しながら行った。

2) 報告会

学会における研究発表および参加の報告を 20 分程度で行った。質疑応答の時間も設け、

表 1 FD 活動の実施状況

	実施状況
1	「看護研究」の研究指導を目的とした統計処理に関する研修会（出席者25名：出席率100%） 実施日：平成28年6月6日 内 容：エクセルで学ぶ統計処理
2	報告会 1. 学会報告 実施日：第1回 平成28年5月2日 日本公衆衛生看護学会 第2回 平成28年10月3日 日本看護教育学会 第3回 平成28年11月7日 日本看護歴史学会 第4回 平成28年12月5日 日本クリティカルケア看護学会 第5回 平成29年3月6日 日本血管生物医学会 2. その他 平成28年7月4日 日本看護系大学協議会報告
3	教員の指導力向上のための研修会 実習指導力向上のためのワークショップ 第1回：平成28年9月5日 （出席者24名：出席率96%） 目標：実習における指導上の課題を認識し、実習指導に対する教員相互の理解を深める。 テーマ：「看護学実習における事前学習への指導 ―実習への動機づけ促進のために―」 第2回：平成29年3月27日 （出席者24名：出席率96%） 目標：実習指導や学内での教育方法の実際について意見交換し、学生の主体的学習を促すための指導方法を検討する。 テーマ：「学生の主体的学習を促す指導方法の検討」

教員の研究内容や最新情報の共有を図った。また、日本看護系大学協議会定時社員総会に出席した教員による報告を行い、事業活動内容について情報を共有した。

3) 教員の指導力向上のための研修会

(1) 第 1 回 FD 研修会

本学では、1 年に 1 回臨地実習指導者を学内に招き交流会を行い、意見交換会を開催している。平成 27 年度の交流会では臨地実習における学生の事前学習不足が指導者、教員の双方から課題として挙げられた。その課題を受け、研修会では「看護学実習における事前学習への指導」をテーマにグループワークおよび発表を行った。全教員を 5 グループに分け、ワークショップの形をとった。1 グループ 5 名の構成メンバーは、職位、領域が均等になるように考慮した。グループ討議時間を 60 分間設け、学生の事前学習の取り組み状況や実習への動機づけを促進する事前学習への指導について、教員が臨地実習指導で経験している具体的な事例を用いて話し合った。討議内容の分類・整理した結果を表 2 に示す。

① 学生の事前学習への取り組み状況について

臨地実習では、疾患及び患者理解のために事前学習は不可欠であるが、学生は課された課題をノートに書き写すことや、期限までにノートを提出することで良しとし、病棟の特性や患者の個別性に合わせた学習が不足していた。実習領域によっては、他領域の事前学習ノートの再活用を許可しているが、学習内容を理解していないため、実習領域が変わると、最初から学習し直す学生も見受けられた。「わからないことを自分で調べて解決する気

表 2 第 1 回ワークショップ結果

1. 学生の事前学習の取り組み状況について	
1 事前学習の必要性を理解できていない	<ul style="list-style-type: none"> ・学生は提示された課題をノートに書いてはいるだけで、内容を理解してまもてはいない。 ・領域によっては事前学習の量が多いとの意見も聞かれたため、他の領域でまもてられてある学習内容は、そこに追加して書くように指導しているが、初めから書き直しをしている。事前学習としての意味を理解していないため、何が必要で何を学習しておく必要があるのかを理解できていない。 ・実習までに、どのような学習をしていいた方がよいのかを理解していない。 ・事前学習した内容が、患者の個別性にに応じて活かされていない。 ・患者や病棟に合わせて学習しているのではなく、教員の求める学習を探りながら学習をしている印象を受ける。
2 主体的な学習ができていない	<ul style="list-style-type: none"> ・型にすることが目的になっている。 ・教員にやらされている感が強い。 ・わからないことを自分で調べて解決する気持ちが低い。
3 個々の学生の取り組み状況に差がある	<ul style="list-style-type: none"> ・事前学習の課題は同様であっても、学生によってノートにまもてられている内容には大きな差がある。 ・提出期限に出せない学生もいる。 ・事前学習をやっていない学生は、実習に出てきても積極性が見られない。 ・手本になるような事前学習のまもめ方をしていない学生もいる。 ・自己学習の習慣がない。
2. 実習への動機づけを促進する事前学習への指導について	
1 事前学習の必要性の理解につながる方略	<ul style="list-style-type: none"> ・事前学習の必要性を学生が理解できるように手段を用いて、学習の本質が伝わるように指導を行う。 ・実習中に、学生がまもてた事前学習の学習内容に基づいて指導を行うことで、事前学習は活用できるという実感が持てるように指導する。
2 学生個々の能力や準備状態の把握	<ul style="list-style-type: none"> ・事前学習の学習内容やまもめ方から学生の能力や実習への準備状態を把握して、その学生に適した指導を行う。
3 学習内容・方法の具体化の提示	<ul style="list-style-type: none"> ・どのようにノートをまもめると実習で活用できるのか、実際に良くできている学生のノートを見せて、具体的に組み立てるよう指導を行う。 ・事前学習を行うにあたり、どのような参考書や図書がよいのか、具体的にアドバイスをを行う。
4 主体性を持たせるための工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の中で、学生が実際に体験するような事象を具体的に話して、興味を持つことから始める。 ・実習中に、実際に学生が困ったり嬉しかったり体験したタイミングで介入することで、学生の主体性を持った学習に繋がっていくのではないかと。 ・事前学習が期限内に提出できない学生もいるので、実習評価の項目に入れて、学生の意識を高める必要があるのではないかと。学生は評価には敏感に反応する。
5 学生の思考を促進し、習慣化できるかわかり	<ul style="list-style-type: none"> ・時間がかかっても良いので、学生が自分で考える習慣がつくように指導する。 ・年間スケジュール等を作成するなどして、いつ何があるのかということがわかるようにすることで、学習することへの意識に繋がるような指導を行う。

持ちがない」、「教員にやらされている感が強い」など、事前学習の必要性を理解していない学生、主体的な学習ができていない学生、記録物の提出期限が遵守できない、自己学習の習慣がない等の学生がいた。一方で手本になるような事前学習のまとめ方をしている学生もいた。

②実習の動機づけを促進する事前学習への指導について

事前学習の必要性を理解していない学生、主体的な学習ができていない学生への指導には、学生個々の能力や準備状態を把握し、事前学習の必要性を理解できるように指導する。学習が不足している場合は補足するための参考図書や文献を紹介したり、よくまとめられている他学生のノートを提示し、具体的に取り組めるようにする。また、講義では学生が実習で体験する具体例を話し、実習での場面をイメージし興味を持てるようにする。実習では、学生が困った場面や嬉しかった体験があった時タイムリーに関わり、気づきを引き出して学びにつなげ、学生が主体的に行動できるようにする。また学生が、自分で考える習慣を持ち、学習計画が立てられるよう時間をかけて学生の思考を促していく。

第1回ワークショップのアンケート結果は、図1の通りである。(回収率88%)

グループディスカッション、テーマに対する興味、実施時期についてはほとんどが肯定的であったが、実施時間帯については肯定的な回答は約半数であった。

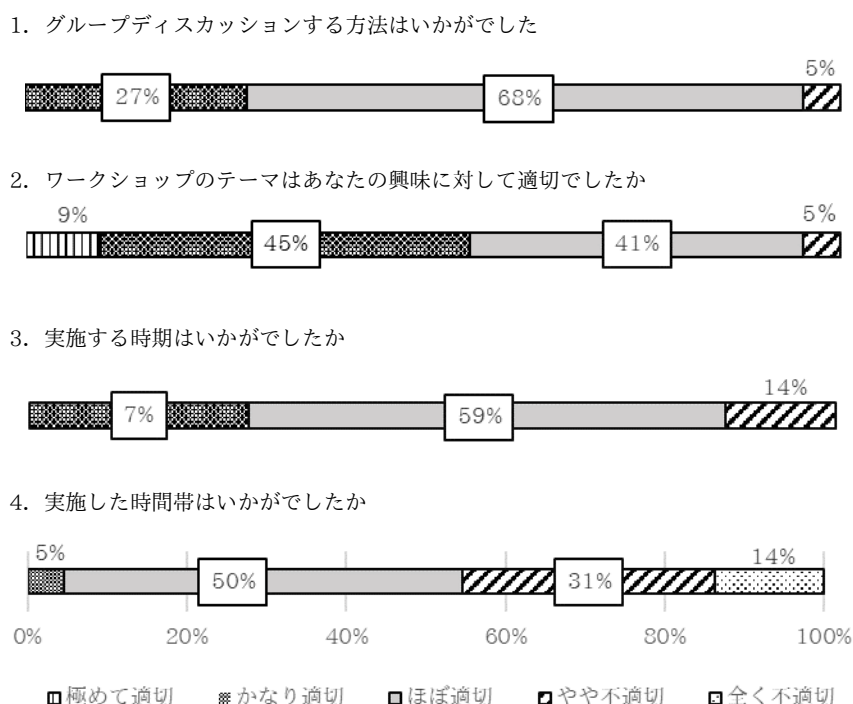


図1 第1回ワークショップアンケート結果

(2) 第 2 回 FD 研修

第 1 回 FD 研修会の結果を踏まえ、「主体的学習を促す指導方法の検討」をテーマとして取り上げ、ワークショップを実施した。第 1 回目ワークショップメンバーを軸にグループ編成し、60 分間のグループワークの後、グループ発表を行った。討議内容の分類・整理したものを表 3 に示す。

①授業(講義・演習・実習)目標を達成するための工夫について

学生の準備状態を整えるために、講義では事前課題を出し予習をして臨めるようにし、実習の事前課題の中から試験問題を出し実習につなげる。また実習に必要な知識を段階的に学べるようにし、実習をイメージできるように授業を組み立てる。実習で活用するノートを作成し事前学習の内容を踏まえて実習レポートの作成を指導する。

学生の思考を促すために、授業の場面や実習記録へのコメントは全体に伝えるだけでなく、学生一人ひとりにコメントし、考える場面を作る。さらに自分の考えたことを発表したり文章で表現するよう指導する。

学生個々のレディネスに合った指導を行うためには、実習目標を念頭に置いて目標がどこまで達成できているか適宜振り返りを行う。実習に出る前に自分の言葉で目標を語らせ、目的意識を持てるようにする。提出されたノートやレポートについては、何が良いのか悪いのか分かるようにフィードバックする。

②学生のレディネス、実習に出てからの学生の状況をどう見極めるかについて

実習開始前に面談を行うことで、実習目標が明確になっているか、これまでの実習で課題になっていることなどを把握できる。事前学習の量や内容をみて「浅い」「深い」を判断し文章能力を見極める。事前学習をどの程度理解しているかは、事前学習ノートの記載量ではなく、実習中の学生とのやり取りを通して見極め、そのやり取りを通して、学生のレディネスや看護観、学習意欲などを大まかに把握する。実習前の面談と実習開始後の面談での表情や目つきなどを日々観察し比較することで、実習中の過緊張状態や不安状態を把握する。過緊張や不安が強い学生は教員の指導が耳に入らないこともある。学生は評価や成績には敏感であるが、単位取得、資格取得が目的の学生もいることを理解したうえで状況を見極める。

③学生が自ら気づくためにどのように教育的にかかわるかについて

学生は、これまでの講義・演習・実習等で学んだ知識や指導内容をすべて習得しているわけではないので、その都度わかりやすく説明する。必要な学習については内容を詳細に伝えと学生は理解しやすい。抽象的な指示ではなく具体的に学生に指示を与えるようにし、学習するために必要な情報を提供する。指導時にはすべてを教示せず、ヒントを与え

で考える楽しさを感じ、学生が自分で考えられようにする。学生個人の欠点を指摘するのではなく、「看護師としてどうなのか」を考えることで、自分自身の行動を冷静に振り返ることができるのではないかと。また、学生は、他学生が経験したことを自己に置き換えて考

表3 第2回ワークショップ結果

1. 授業(講義・演習・実習)目標を達成するために、どのように指導を工夫しているか	
学生の準備状態を整える	<ul style="list-style-type: none"> ・講義では事前課題を出して、予習してから授業に臨ませる。 ・事前学習してくるよう提示するが、やってこない学生も多く、事前学習の内容を試験に出すなどしている。 ・授業での課題が実習へつながるように課題提示している。 ・授業の中で実習の写真を見せるなどして、実習をイメージできるように授業を組み立てる。 ・臨床実習に必要な知識を講義で段階的に学ばせている。さらに講義で学んだことが実習で活用できることを意識している。 ・基礎専門科目と看護専門科目担当教員との情報交換が必要である。 ・実習の視点(方向)を決めて準備をする。母性実習ならばウエルネスに視点を当てる。 ・保健師実習は4月から補講(実習準備)している。 ・講義の中で、実習で活用するノートを作成している。 ・精神の実習では、事前学習の内容を踏まえて実習レポートを記載するよう指導している。 ・提示された患者選定の中で、学生自身で選んでもらう。
学生の思考を促す工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・授業・記録へのコメントは全例に伝えるのではなく、一人一人にコメントを記入して渡し、考えさせる。 ・教員が分析し伝えてしまうと学生が自分で考えない。学生自身が分析できるように誘導して指導していく。 ・自ら発言や文章で自分の意見を示す学生が少なく、考えたことを自分の言葉で表現する工夫が必要。
学生個々のレディネスに合った指導	<ul style="list-style-type: none"> ・実習目標を念頭に置き、目標達成に向けた振り返りを学生と適宜行う。 ・臨床では実習目標や学生のレディネスに合わせて学習環境を整える。 ・実習に出る前に目的意識を持たせることが大切であり、学生自身で自分の実習目標を語らせる。 ・1, 2年生の基礎実習では、ほとんど学生の情報がない状況。全員に同じように指導し、学生の反応を見て個別に対応する。 ・学生へのフィードバック(ノート、レポート)を上手くする必要はある。何が良いのか、悪いのか、記載する。
2. 学生のレディネス、実習に出てからの学生の状況をどう見極めるか	
知識・技術について	<ul style="list-style-type: none"> ・学生からの質問内容で見極める。 ・実習期間が短いので、最終記録で判断する。 ・事前学習の内容で知識の程度はわかる。 ・質問されなくても「何もわからない」「考えない」など、実習中のやり取りを通して学生のレディネスがわかる現状である。 ・実習に行く前の段階で、学生と面談すると、実習目標や文章能力、これまでの実習経験での課題を把握でき、ある程度のレディネスや状況を見極めることが可能である。 ・事前学習の内容を口頭で質問するなどして、学生がどの程度理解しているかを把握する。 ・事前学習の内容で「楽しい」「足りない」「不足している」と判断する基準は書いてある内容の量的部分、教科書の丸写しではなく、内容が実習に行くレベルかどうかを見る。 ・学生の情報が少ないまま実習に行くこともある。事前学習などの知識だけでなく、周囲との関係性を通してレディネスを把握する。 ・実習初日から1週間、学生の言葉で患者の全体像を語らせて、不足している情報や思考過程に関して指導している。 ・実習のグループの人数は3～5人、4人がベスト。この人数ならば状況把握が可能な範囲。 ・実習に出てからの学生の状況を見極める。 ・誰のための実習なのかかわかっているかどうか。 ・演習のワークシートを準備させる。持参しないと参加できない。 ・日常生活の中(チューター・授業)で、「看護師になりたい」「働きたい」「考える力」があるのか知る。
学習態度について	<ul style="list-style-type: none"> ・指導者とのやり取りで見極める。 ・患者・臨床側の反応でもわかる。 ・成績を判定する学生、資格が取れればよい、単位が取れればよい、という学生もいる。 ・実習前に学生との面談で、看護観や不安などを把握でき、ある程度のレディネスや状況を見極めることが可能である。 ・毎日、表情・顔色・目つきをみて状況(メンタルな部分)を見極める。過剰に不安が増す学生がいる。 ・話を聞いていてもモウを取らなくなる。 ・さまっている場合もあるので見極めが難しい。 ・学生の言動に注意する。聞いていないのではなく、聞くことも出来ない。
3. 学生が自ら気づくためにどのように教育的にかかわるか	
情報を提供し動機づけ	<ul style="list-style-type: none"> ・学生は知識が無いので、早期に教員がアナウンス、提案する。(保健師インターシップ) ・学生に情報を提示する。 ・学生はこれまでの講義・演習・実習等で学んできた内容を完璧に身につけていると教員が判断せずに、忘れていた場合は現場で再度説明する。 ・学生に「これを勉強したほうが良い」と伝えても、なかなかやってこない学生がほとんど。大まかに学習内容を伝えるのではなく、詳細な内容を伝える方が学生は必要な部分を理解しやすいのではないか。 ・抽象的ではなく、具体的に学生に指示を与えられるようにする。抽象的だと学生の行動実習に繋がらない。
学生が自分で考えるように促す	<ul style="list-style-type: none"> ・最初で学生に考えさせて、すぐに答えを出さずに保留する。考える楽しさ、なんでも面白いように伝える。周囲に関心を持ち興味を持って考えられるようにする。 ・粘り強く考える姿勢を大切にする。 ・到達してしまえばレベルまでいけない(学生)はレベルを下げる。 ・教員が「あれが出来ていない」といっても、学生に「どう思おうのか」と聞いて、考えられるようにする。 ・学生は自分のウィークポイントは知っているが、「なぜか」を考えない。個別に面接し、学生なりの目標を決定させ、達成することで成長を促す。 ・学生個人の欠点を指摘するのではなく、「看護師としてどうなのか」を考えさせることで、自分を見つめる冷静に考えられるのではないかと。
学生が体験できるように関わる	<ul style="list-style-type: none"> ・自分で体験しないとわからない。 ・他の学生が失敗したことに対して、自分のこととして考えられない。 ・欠点を見つけることに抵抗がある学生も多い。自分を知ることで改善できる。 ・個人を指導するのではなく、グループメンバーの言動を比較・参考にして気づかせる。
学生の興味や成功体験を引き出すように関わる	<ul style="list-style-type: none"> ・面白がらせる。事例を出すようにする。具体例を出して、噛みつきを良くするように工夫する。学生の実習の成功体験を取り入れる。いかにいづきを良くするか重要。意識してタイミングよく出す。 ・学生を認めながら「出来た、いことをやってみよう」「考えよう」というモチベーションを高める。 ・学生に達成感を持たせる。
学生と教員の信頼関係を作る	<ul style="list-style-type: none"> ・学生を傾聴、侮からせると教員との信頼関係が生まれにくい。教員に何でも問う関係性を作ることが大切ではないかと。 ・学生が自ら反省する時間を設けることは難しい。チューター面接の時期等を考慮し、共に振り返る時間を作っても良いのではないかと。
4. その他教育方法の提案	
<ul style="list-style-type: none"> ・大学と臨床のギャップが出てしまうので、なるべくそのギャップを無くすために、臨床指導者と教員が話し合っていくことが大切。 ・授業でプリントを作成していく。→ そのプリントが実習の事前学習になるように、実習に使用できるように → ゆっくりは国語にも使用できるようにする。 ・事前学習に限らず、教員が評価の基準を理解し、統一すること → 教員同士がディスカッションする。 ・講義・授業の評価試験で国試の過去問題を出す。国試の出題基準に触れる。 ・実習の事前学習ノートは、基礎で作成したノートを他領域で活用できるようにしたい方がよい。 ・特に基礎実習は最初の実習であり、これから4年間および看護師のイメージが決まる実習であるため、良いイメージのまま終了できるように指導する必要がある。また、日常生活の態度も学ばせる。 ・実習に行く上でどの程度学生に求めるのか、教員同士で基準を統一しておく。 ・自分で考えようとし、知識・技術の積み重ねがなく、自らが付けられないなど、学生の現状を考えると学生は変わらぬため、教員の対応を変えるしかない。 ・事前学習を4年間で各領域の内容が繋がるようにする。基礎は基礎、成人は成人と、学生は5人に分けてしまう。 ・4年間の授業内容の特徴を洗い出すために、マトリックスを作成する。共通する項目は、4年間で追加できるようにして、特徴的なものは各領域で追加していく。領域が協力することが大事。 ・上武大学の教育目標を照らし事前学習について全体で統合できるように作成していく。 	

えられず、実際に体験しないとわからないことが多い。カンファレンスなどの場面でグループメンバーと体験の共有を図り、相互の学習が深まるようにする。

④その他：教育方法の提案

大学と臨床側で指導の方向性や指導方法にギャップが生じている場合もある。そのギャップを無くすためには教員と指導者との連携が重要である。授業でプリントを作成しそのプリントが実習の事前学習となり、実習に活用できるようにする。事前学習に限らず教員が評価の基準を理解し統一するよう教員間でのディスカッションや情報交換が必要である。各領域の事前学習が4年間で内容がつながるようにする。授業内容の重複を防ぐためには、授業内容のマトリックスを作成し領域間で共有することが重要である。大学の教育目標と照らし合わせ、事前学習についても全体で統合できるようなマトリックスを作成する。

第2回ワークショップのアンケート結果は図2の通りである。(回収率79%)

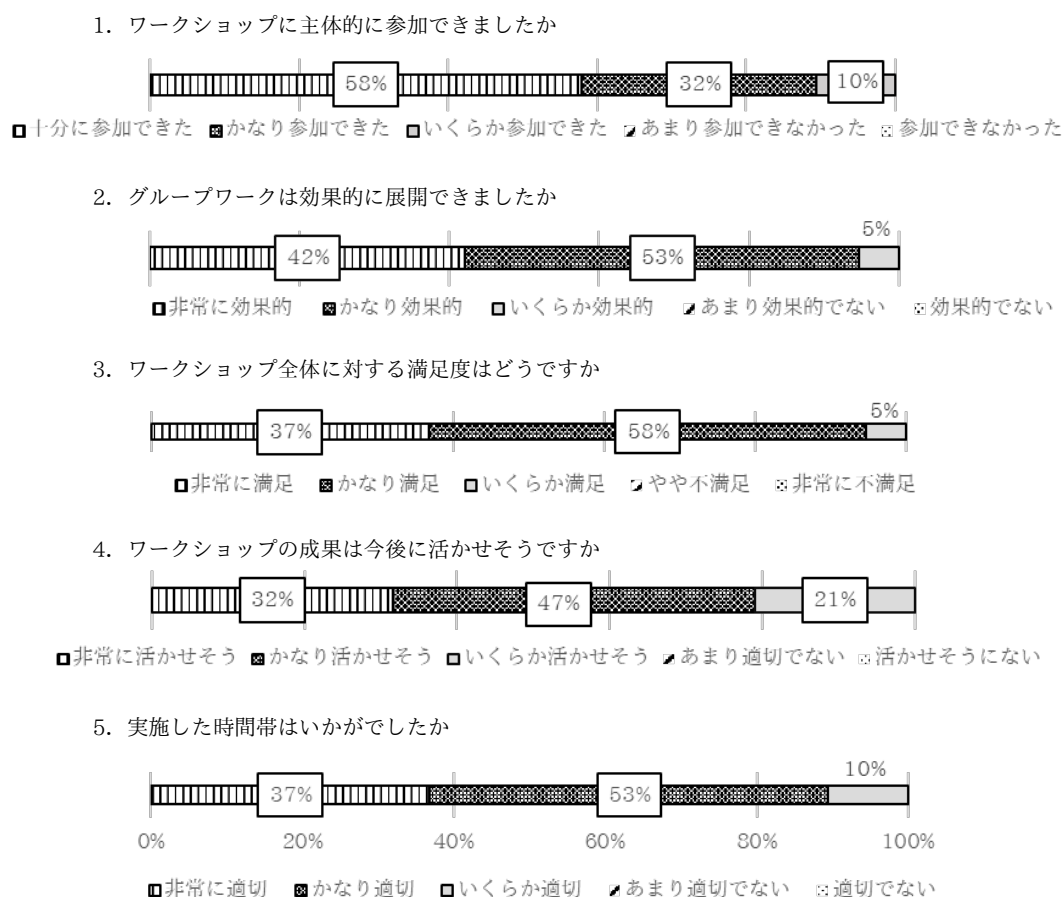


図2 第2回ワークショップアンケート結果

主体的参加状況、ワークショップの効果的展開、満足度及び開催時間の項目については 90%以上が肯定的であった。今後の指導への示唆についての項目も 80%が肯定的であった。自由記述からは、メンバー構成やテーマ設定について第 1 回ワークショップからの継続性があり、現実的で有意義な討議ができたとの意見が多くあった。

4) 平成 28 年度の FD 活動に対するアンケート結果

(1)FD 活動が日頃の教育・研究活動にどう役立ったか

「他教員の研究分野や関心を知り得た」、「研究報告から多くの示唆を得た」、「自分の研究活動への動機づけになった」、「教員全体の FD に対する意識を揃える上で役立った」、「研修会のテーマが実習に関することだったので、すぐに実習指導に活かすことができた」などであった。

(2)教員自身の更なる自己研鑽や成長の促進、組織力を強化するために、どのような FD 活動があればよいと思うか

「授業改善のための教育方法について学外の講師を呼び講演をしてもらいたい」、「領域外の共通事項（例えば実習についていけない学生をどう支援するか）

について領域を超えて教員同士のグループ研究などに取り組める風土ができる

と面白いと思う」、「今回のようなディスカッションは教員間の共通理解に繋が

る、このような機会を継続していただきたい」、「教員自身というより、大学教育の理念を明確にしてはと思う。教員各々が同じ目標に向かって努力していかないと成長にはつながらない」、「領域間で教育の取り組みを共有して学部全体が目指す教育方針を統一していくための活動」などであった。

(3)FD 委員会への要望

「年間を通して、あるいは過年度からの流れを考慮してテーマを設定する。リセットではなく、積み重ねていくように活動を継続する」、「教員各自が取り組んでいる授業の工夫を発表することもよい」、「時間的な負担がないよう開催日時を検討してもらいたい」などであった。

IV. 総括

これまでの FD 活動は、教育方法の改善や向上のために有効な活用がされていないこと、継続した取り組みができていないことが課題となっていた。実習指導上の課題の検討は平成 26 年度の FD 研修会で行っていたが、教育活動に活かせるかの評価や継続した検討はされていなかった。今回 FD 活動として行った 2 回のワークショップは、臨地実習において、各教員が経験している指導上の問題点について忌憚のない意見交換を行った結果、各領域

の教員が抱えていた指導上の問題は共通しており、組織的に取り組む問題であることを共通認識できた。さらに、個々の教員の指導に活かせる方向性を見出すことができ、有意義な研修会であったと考える。

杉森ら(2016)は、FD について、教員個々が持つ学習ニーズ充足への支援も目的とし、「その組織においてよりよい構成員となるために必要な学習機会の提供である。」と述べている。さらに、日本看護系大学協議会看護学教育質向上委員会の報告(2012)では、若手教員に対する FD 活動が各大学において系統立てて行われていない実態や、若手教員の役割の中核における「学生の学習状況に対応し教授技術を活用した効果的な実習指導」について困難性が見られたとの報告もある。今回のワークショップで教員が日頃経験している実習指導上の問題について意見交換を行い、実践可能な指導方法が見いだせたことは、教員各自が日常的に取り組んでいる教育方法や実習指導上の工夫等、教育内容の改善に向かう意識化が図られ、個々の教員が主体的に取り組む土壌作りを培う一助になったと考える。また教員の出席率が高く看護専門以外で実習を担当しない教員が討議に参加したことからも全体的に FD 活動への意識化が図れたのではないかと考える。

また報告会は、教員の研究内容を知る機会となり、教員相互の研究活動への刺激にとどまらず、自らの研究への動機づけや教員間の研究成果の共有に寄与することができた。厚生労働省の報告書(2010)では、看護教員に求められる能力に関して、「看護教員の質の向上が不可欠である」と明記されており、教員個々のスキルアップは指導力の向上へと繋がり、更には大学組織全体の教育力向上に繋がるものと期待できる。

V. 今後の課題

今回の報告は平成 28 年度の FD 活動の中で研修会に焦点を当てた。この取り組みの結果として、学生指導上の問題を教員間で共通認識し、問題解決への糸口をつかむことができた点で大きな意義があり、教員個々が FD に主体的に取り組む土壌作りができたと考える。FD のねらいには、大学の教育理念を様々な形で浸透させていくことが望まれており、教員個々が FD のねらいを理解し、主体的に取り組むことが重要である。教員集団は職位、領域など多岐に及び、教員の自己研鑽の方向性は必ずしも一致していないため、教員個々の問題解決だけではなく、教育力向上のために大学組織として問題の共通認識および解決に向けた FD 活動の継続が重要である。そのためには、全教員が主体的に FD に参加できるような状況の設定、学習支援ニーズに見合ったプログラム構成などを念頭に置いた FD の企画と実施、さらに FD 活動の結果が有効活用できたかを評価するプロセスを継続していくことが今後の課題である。

引用文献

片貝智恵, 高橋ゆかり, 渡部洋子他 2 名 (2010): 看護学部の FD 活動におけるピアレビューの現状と課題.

上武大学看護学部紀要. 6(1), 44-52.

厚生労働省 (2010): 今後の看護教員のあり方に関する検討会報告書.

<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/02/dl/s0217-7b.pdf>, (参照 2017.10.18).

杉森みど里, 舟島なをみ (2016): 看護教育学 (第 6 版). p359, 医学書院, 東京.

日本看護系大学協議会看護学教育質向上委員会 (2012): 平成 23 年度活動報告書

若手看護学教員のための FD ガイドライン ―看護学教育の質向上をめざして―.

<http://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2012/07/H23-FD-forHP.pdf>, (参照 2017.10.18).

文部科学省 (2011): 大学における教育内容等の改革状況について (平成 21 年度).

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/__icsFiles/afieldfile/2011/08/25/1310269_1.pdf, (参照 2017.10.18).

文部科学省 (2016): 大学における教育内容等の改革状況について (平成 26 年度).

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/__icsFiles/afieldfile/2017/12/06/1380019_1.pdf, (参照 2017.10.18).

文部省大学審議会 (1998): 21 世紀の大学像と今後の改革方策について

―競争的環境の中で個性が輝く大学― (答申).

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_daigaku_index/toushin/1315932.htm,
(参照 2017.10.18).